

### 表現よりもまず理解を

“読み”とは“理解”することであり、“書き”とは“表現”することです。“表現”という行為は、十分に“理解”し、身についた後に、初めて、それを用いて表現しようという意欲によって起こるものです。

十分に理解できないうちに、それを用いて表現しようという意欲など起こるはずがありません。その意味でも、“書き”は“読み”の完成の上に始められるべき学習であって、同時に行ない、同時に完成を求めるべきではないことがよくわかると思います。

まして、幼児の生活には、文章を読む生活は考えられますが、“書く”生活は考えられません。“文字表現”をしなければならない理由がないのです。

わが国では、小学校の一年生から、“作文”をやらせていますが、これは背伸びした学習であって、まだ早すぎるように思われます。というのは、西欧諸国では、いずれの国でも作文教育を、三年生、早くて二年生の中ごろ以降に始めていて、その時期においては、日本の学童の作文の方が優れているのですが、小学校の終わりから中学校にかけては、逆に劣ってくる(国立国語研究所調べ)という調査があるからです。

能力を無視した時期尚早の教育は、初めのうちだけ良いように見えても、発育が早く止まり、結局はだめになってしまいます。わが国の作文教育は、明らかにその例だと思えます。内容が充実しないうちから、“表現”活動をさせても成功するはずはないのです。まして、幼稚園で“作文”教育を行なっているところがあると聞いていますが、はなはだ見当ちがいなことで、幼稚園では文字による“表現”よりも文字の

“理解”に重点を置いて、知識を吸収し、内容を充実させる学習に努めるべきだと思います。

たしかに幼児は、わたしたちが驚くような文を書くことがあります。しかし、それは、文章よりも、言葉の表現として受け止めるべきだと思います。

わたしは、当時三つか四つだった長女と、田舎道を山の方に向かって歩いて行きました。その時、「おや、僕(四つ上の兄の言葉をまねて、そういう習慣がついていた)が歩いて行くと、お山が逃げて行くよ。僕は強いんだなあ」と言ったのです。

そう言えば、たしかに、こちらが一步進めば向こうの山は一步後退するように見えます。しかし、わたしたちおとなは現象を常識的に頭で見て、感じるがままに見ようとしません。

ですから、わたしたちは時々子どもに教えられます。わたしは、この時、幼い娘に教えられた、と思いました。つまり、幼児の作文に、おとなを驚かすような表現があっても、少しも不思議はありません。しかし、それは、子どもの見方が優れているのであって、作文(文章表現)が優れているわけではありません。

幼児期は、文章表現を伸ばす時期ではなくて、その基礎である“言葉による表現”を伸ばす時期です。そして、おとな以上にするといい、真実を見る目を、さらに育てるべきだと思います。

つまり、“文章作文”ではなくて“口頭作文”を育てる時期です。そもそも文章は、言葉を文字で写したものですから、言葉による表現“口頭作文”を磨いておけば、文字力が身についた時、それをすぐに“文章表現力”に移行させることが自然にできると思います。